

10月16日 ゲスト卓話



野原哲夫 様
野原税理士事務所 所長
さいたま欖RC

テーマ「マルサと職業奉仕」

5月13日(火)創立10周年記念式典を開催したさいたま欖ロータリークラブ所属で税理士の野原哲夫と申します。森田年度で米山奨学部門の副幹事、クラブ第3代目会長、井橋年度ガバナー補佐、そして、RLIのリーダーが3年目に入り、現在財団監査委員をしています。

ところで、RLIリーダーのメンバーで貴クラブの金杉様と知り合いとなり、金杉様の人柄に感動し、今回卓話を引き受けましたことをご理解いただきたいと思います。

私は国税当局に27年間在籍47歳で退職し、税理士を開業しました。

国税に勤務したうち、25歳(昭和50年)～30歳(昭和55年)と41歳(平成3年)～44歳(平成5年)の間マルサの仕事をさせていただき、この厳しい経験が私を育てていただいたと感謝しています。

マルサとは、国税査察制度であり、多くの納税者は適正な申告と納税をしていますが、一部に大口・悪質な脱税する者がいることは誠に残念ですが、税の課税の公平を図る見地から、裁判所から令状を頂いて強制調査することです。

脱税はいわば社会の敵というべきもので、このような脱税を摘発するために昭和23年「申告納税制度を守る最後の砦」として、また、「一罰百戒」という目的のため国税査察制度が創設されました。国税犯則取締法(国犯法という)という法令で税法の任意調査とは異なり、強制調査です。半沢直樹でマルサの統括官が出てきましたが、ちょっとドラマチックで笑ってしまいました。マルサでの経験談は数多くあり、全てベストセラーになるドラマとなりますが、本日そのいくつかを話させていただきます。

通算22年間マルサに勤務した元国税査察官の言葉に「金のためには恥を捨てることがあるが、人間には道徳という名のブレーキが必要だ」があります。また、検察のトップである検事総長が「悪は、眠らせない」と言って病床から指揮したこともありました。

ロータリーの金看板といわれる職業奉仕を実践していれば、マルサの対象になりません。真のロータリアンは、人格識見に優れ、人間性豊かで、素疇らしい経営者であり、そして、納税者であることがロータリー活動を通して確認することができました。感謝